

編集後記

【編集後記】

- ・南米が原産地で冷涼な気候を好む作物ですが、栽培時期、高度等適作期を選びながら、寒冷地から熱帯地域まで広く栽培されている「ばれいしょ」を特集しました。(特集名称については、「ばれいしょ」としましたが、執筆者には、所属機関等で使われてる名称でお願い致しました。)
- ・南北に細長い日本のばれいしょ生産は、冷涼な北海道から亜熱帯気候の沖縄ま広く行われており、北海道が生産の太宗を占めているものの、第2位の生産は鹿児島県、3位は長崎県でそれぞれの地域の気候に合わせて栽培されています。作型は、大きくは1期作(春作)と2期作(春作と秋作)に分かれますが、近年は西南暖地の島嶼・無霜地帯の冬作(通称)が拡大するとともに、北海道も含めマルチ栽培等による作期の拡大もあり、周年どこかで収穫されている状況にあります。
- ・種(苗)半作と言われるとおりに種苗の良否が農業生産に大きく影響しますが、ばれいしょはその中でも特に「種いも」の良否が生産に大きく影響する作物かと言えます。そのため、その基本となる原原種は国が関与して生産し、種いもはすべて植物検疫の対象として種ばれいしょ検査が行われ、合格証のない種いも流通は禁止されています。
- ・独立行政法人種苗管理センターよりは、原原種の生産に至るウイルスフリー化、増殖体系等種いもの基本の部分、植物防疫所からは、原種、採種に至る種馬鈴しょ生産と検疫の意義、現状、課題等について、それぞれ紹介頂きました。
- ・種いもの良否とともに、その前提として品種の問題があります。長い間、ばれいしょと言えば「男爵薯」「メークイン」という時代が続きましたが、加工食品用品種の草分け的なトヨシロ、

青果用品種のキタアカリ等、新育成品種が徐々に台頭してきています。特に近年は、アントシアニン等機能性を加味した品種開発や、原産地の遺伝子を取り込んだ特異品種等、品種の多様化も進んでおり、その概要を紹介頂きました。また、育種は国や道県の研究機関が担っていましたが、近年、JA、大学等含め民間育種が知的財産権の保護制度の拡充と合わせ広く行われるようになり、育成(導入)品種の普及も始まっていますが、その概要を「関係機関紹介」として紹介頂きました。

- ・ばれいしょ需要は加工食品用の増加が著しいものの、その大方を輸入加工品によって賄われている状況から国内生産は漸減している状況にあります。このため、加工食品用需要の国産原料拡大を目指した取り組みが行われており、品種の多様化も国産加工品の差別化の一環となっています。
- ・種ばれいしょの生産は11道県が指定されていますが、総体的に北海道への依存度が高まってきている中でシストセンチュウの発生地域が拡大し、採種地の確保が課題となっています。同様に長崎、青森両採種県もストセンチュウの発生があること、作型の多様化から種いもの供給要請も多様化していること、等から採種事業の今後については所要の検討が必要となっており、関係者の取組に期待し国産ばれいしょの明日に期待します。

[おわりに：本号が私の編集の最終号となりました。経験のない編集業務で、関係機関・関係者にはお手を煩わしましたが、皆様の暖かいご支援・ご協力賜り7号まで発刊できましたこと、誠に有り難く心底より感謝と御礼を申し上げます。「特産種苗」の特産農作物振興への寄与を願いつつペンを置きます。]

発行日 平成22年4月1日
発行 財団法人 日本特産農作物種苗協会
〒107-0052 東京都港区赤坂2丁目4番1号
白亜ビル 3階
TEL 03-3586-0761
FAX 03-3586-5366
URL <http://www.tokusanshubyo.or.jp>
印刷 (株) 丸井工文社